

ジークフリート・カヴェラウの「徹底的学校改革者同盟」論（Ⅲ）

船尾 日出志 訳

社会科教育講座（哲学）

Siegfried Kawerau's Der Bund entschiedener Schulreformer (III)

Hideshi FUNAO

Department of Social Studies, Aichi University of Education, Kariya 448-8542, Japan

訳者から

ドイツ・ワイマル期の1919年の徹底的学校改革者同盟創設以来の幹部であり、同盟の代表的人物でありパウエル・エストライヒの盟友であったジークフリート・カヴェラウが、1922年に刊行した冊子『徹底的学校改革者同盟 成立と本質』【Siegfried Kawerau: Der Bund entschiedener Schulreformer. Werden und Wesen. Oldenburg und Co. Verlag, Berlin 1922】を訳出する。同冊子はパウエル・エストライヒによって編集され、徹底的学校改革者同盟に委託を受けたドイツ教育の改革のための『徹底的学校改革』叢書の第1号として刊行された。エストライヒが執筆者として同盟のなかで社会科＝歴史教育を専門としていたカヴェラウを選んだのは当然のことと言えよう。

同冊子の構成は次のようになっている。当然、2～7の著者はカヴェラウである。

1. パウル・エストライヒによる添え書き
2. 時代
3. 徹底的学校改革者同盟の端緒（労働学校思想）
（以上は平成24年度の研究報告【愛知教育大学研究報告・教育科学編62, 183-190, 2013-03-01】に掲載）
4. 闘争と成熟（体験学校思想）
5. 新しい精神の出現（生産学校思想）
（以上は平成26年度の研究報告【愛知教育大学研究報告・教育科学編64, 119-126, 2015-03-01】に掲載）
6. 蓄積と創造（嵐の前）
7. 時代の渦の中で（現代）
（以上は今回）

なお本文中の《 》内は訳者による補足である。

蓄積と創造

（嵐の前）

蓄積と静かな創造の時代である。1920年から1921年にかけての冬は。同盟の力は強まり、内的な堅固さが達成されている。何らかの教条主義傾向も現れることなく。生産思想は理論と実践についての見事な絆である。

すなわち一方で分化、個別化がよりいっそう起こるにつれ—最近100年間における女性の職業活動の分化によってとてつもなく高められた—、他方ではそれだけより強力に統合の、共同体形成の諸力が喚起されねばならない（人間の社会が自動的に時代の激流のなかで、はね散らされることのないように）。その2つの傾向の間の増大する緊張は創造的な契機を与えている。ミュラー＝ライアー（Müller-Lyer）はかれの社会学のなかで、それらの相反する力がせめぎあう事態に、個人的＝社会的時代という言葉の刻印によって対処しようとしている。

今日の社会運動が内包するそれらの力にこれからの学校は対処しなければならない。すなわち、「共同体と個人」という2つの点を焦点として楕円が描かれる¹⁾。

探求的かつ活動的に、同盟はその思索を展開させている。両親および両親評議会のための一連の講座のなかで、すでに昨年1920年に重要な教育学的諸問題がベルリンで取り扱われ、1921年にはますますより包括的に宣伝活動がプロイセン邦全体で始まった。

「新教育」誌は出版社を変更し、そして1921年1月1日以降はC.A. Schwetschke & Sohn社²⁾から発刊された。そして刊行日時の厳守と洗練された装丁によって消えていた読者層を取り戻している。

パウエル・エストライヒは一極度に厄介な宣伝活動とならんで—生活学校と生産学校としての弾力的統一学校の問題の根本的かつ新たな検討に献身した。かれはその問題について、（1921年4月5日と6日）教育と教授のための中央研究所の教育学イースター週間におい

て、自己の以前の知性主義的・自由主義的立場との鋭い対決のなかで、語った。

フランツ・ヒルカーはかれの生活学校の一連の論文の説明を第4号として整理した。第2号としてワルター・シェンブルン (Walter Schönbrunn) の芸術教育綱領『学校における文学の体験』が、そして第3号としてベルリンのリンデンホフから追放された教育者カール・ヴィルカー (Karl Wilker) の呼びかけ『生活訓練としての福祉教育』が出版された後に。

エストライヒによって編纂されたシリーズ『徹底的な学校改革の実践』のなかでは、同じく高齢の言語学者ワルター・シェンブルンが重要な著書『批判的思考のための教育』を出版した。しかもラテン語の古典の講義において (キケロの『最初のカティリナの演説』をきっかけとしつつ)。第3号として、共和国憲法148条第1項「すべての学校において、ドイツ国民性と国際協調の精神において、道徳的教養、公民としての考え方、個人的及び職業的有能さを身につけさせるように努力しなければならない。』の実行に関するエーリッヒ・ヴィッテ (Erich Witte) の提案が『諸国民友好の精神における教授』というタイトルで刊行された。

そうこうするうちに、エストライヒとカヴェラウは活動に没頭した。その成果はそれほど満足できるものでなかった。マックス・エプシュタイン (Max Epstein) 教授は、教育の本を書くか、あるいは書かせるという計画をたてていた。その際、次の3分冊が考えられていた。第1巻『基礎学校卒業までの子どもの教育』、第2巻『基礎学校後の義務教育年齢の教育』および第3巻『就学後の職業教育と大学教育』。エストライヒとカヴェラウは、そのような機会を学校改革的諸理念の普及のために利用すべきであると考え、そして第2巻の作成に着手した。エストライヒは第1部「必修教授と選択教授としての学校の構造」を執筆し、カヴェラウは第2部「11歳から18歳までの学校と家庭での教育」を執筆した。その両者が最終的編集を委ねた大学教授のエプシュタイン氏は両者の原稿をかなりの程度で使用した。とはいえエプシュタイン氏は、元々可能な限り徹底的に切りつめられていた草稿において広範囲に青鉛筆の訂正をおこない、さらに他の数人の論文を挿入した。その結果、構成が、特に第2部の構成が完全にだめになった。それによりエストライヒとカヴェラウは手を引き、そして第2巻はエプシュタイン教授単独の責任のもとで1921年末と1922年に分冊で発行された。その第2巻は同盟員の多数の価値豊かな個別研究を含んでいる。そのなかで実り豊かなのは、なんといっても、生産的思想が今やすべての特別な形態を精神的に貫くべきであるという全体的立場から個別諸問題が追究されているということである。

その啓発活動と建設活動 (それらの活動にプロイセン全体の同盟員が参加した) と連携して、活発な宣伝

活動が進行した。それは今、本当に特別なことだが、ハノーバー、ザクセン、ポメルンおよびラインラントに拡大した。

ザクセンではすでに1920年の聖霊降臨祭に邦議会がアウグストゥス城で開催された。そこでは主に、共同的学校管理の諸問題および実験学校の樹立が議論された。実験学校のために次のことが要求された。リズム体操的側面に応える体育教育、表現文化の側面に応える絵画教育。補助学問としての外国語の位置づけ。必修教科は文化科と自然科のみ、そのうえにいくつかの自由コース。普通民衆学校とラテン語的基盤という2つの基盤。

そのようなさしあたり純粹に人文学的な立場はその後次第に減少した (もっともベルリンにおけるように完全に失われることはなかった)。そのことはザクセン人文学者クラブにおけるさまざまな特別な闘いによっている。そのクラブでは学校改革者が重要な役割を演じた。1921年1月に再び部内会議のために学校改革者たちが集まった。ますますより以上に、実験学校の実現のための可能性が、現実存在する状況に依拠しつつ、関心の前面に出てきた。とりわけラインハルト・リーベ (Reinhard Liebe) はその理念に貢献した³⁾。1921年12月のザクセンでの同盟の代表者会議もまた全力でそれらの要求を支えた。その強力なアジェンダは効果がなくはなかった。1922年1月10日に文部大臣はザクセン邦議会で、学校改革者たちにかれらの理念の実践的検証のためのチャンスを与えたい、そしてしかもドレスデン自体で、と表明した。再度、ケムニッツで開催された1922年イースター会議は、実験学校へのアピールをザクセン邦邦に行き渡らせるための学校改革者たちの演壇となった。そしてますます新たに生じる諸困難の克服後、願望が現実となった。1922年4月19日に文部大臣フライスナー (Hermann Fleißner, 1865-1939) は自ら、最初の国立中等実験学校をドレスデンにおいて設置した。その学校は市立民衆実験学校と連携して実験活動をおこなった。

始まりは小さくそして些細である。12人の少女と18人の少年が最初の学級を形成した。同盟の仲間 R. ツァッシェ (R. Czasche) と G.D. エックルト (G.D. Eckardt) はその仕事にたいする活動のために招聘された。その実験学校が生産学校に成長してほしいものだし、それが民衆と非常に緊密な接触のなかで活動してほしいものだ!

ハノーバーもまた最初から同盟に参加していた。長期にわたるさまざまな変動の後、そして多種多様な内部的困難の克服の後、ハノーバーではとりわけ1921年夏にグリメ (Adolf Grimme, 1889-1963) の指導のもとで、数多くの会議において包括的な、特に宗教的に根拠づけられた綱領が生み出されるという成果をもたらしたきわめて真摯な生活が展開された。主導理念は宗

教的に把握された畏敬の理念である⁴⁾。「わたしたちは、誤解された個人主義から利己主義と主観主義への傾向を促進させかねない教育を拒絶する。それにたいして、わたしたちは個々の人間のなかに、『宗教的人間』として世界における道徳的使命を有し、そして共同体のその他の構成員と共に絶対的目的についての共同活動を義務づけられていることを知るべきである」という意識を喚起する教育を志向する」。

宗教的思想のそのような彫琢がどんなにさし迫り、そしてすべての同盟の活動から認識されうるのか。しかし他方では、その原理の強調によってその偽造に至り、アウトサイダー的生活に、静寂主義、つまり耽美的自己敬虔主義に、「大衆」からの遊離に陥る危険がある。とはいえ綱領の冒頭では次のように述べられている。「わたしたちはそれゆえ、人間を顔のない大衆から道徳的な人格へと救済することを目指す教育を志向する」。その（そこから「救済」されるべき）「顔のない大衆」という言葉—それはどんなに危険か、そこにおいて誤った強調がいかに容易に忍び寄るか！

シュテッティーン《1945年までドイツ領、現在はポーランド北西部のオーデル川河口の港湾都市》の友人たち（かれらのなかでは特にヴィルヘルム・ミース（Wilhelm Mies）が著名である）が、闘争の開始と同時にベルリンの者たちにとってかわっていた。しかしボンメルン人《シュテッティーンはボンメルン邦内にあった》であるエストライヒ《ただしベルリン在住》はシュテッティーンの友人たちのなかで特に共感を得ていた。しかしそこでもまたまず、当初、内部のまとまりを脅かしそして実践的活動を萎えさせていた言語学的《細かなことにこだわるような…》異議のすべてをコントロールすることが重要であった。

1921年のイースター（3月29日と30日）に、シュテッティーンの人々は確かに成功した会議を催した。それは一般的には同盟の諸目標に、そして特殊にはその方向における個々の実践的な試行についての報告に時間が割かれた。モンテッソーリ・システムへの、ハンブルク共同体学校への、ヴィッケルスドルフの生活への洞察は高い関心を引き起こした。正当にもエルゼ K.ヘファー（Else K. Höfer）はガウディッヒ（Hugo Gaudig, 1860–1923）のシステムをきらびやかな言葉の文化であると退けた。特に印象的であったのは、ブラウンシュヴァイクの女性（ローヘラント学校出身）によるリズム体操の擁護であった。

長い間に、ポメルンにおける同盟の活動は、目標に向けて並行して進むが、しかししばしば別の利害にも寄与する社会民主党系の教師たちの党活動を萎えさせた。ようやく1922年8月にポメルンにおけるシュタルグループの文化会議において、その点での解明がなされた。文化的立場が選挙団体の宣伝よりも優勢であったのだ。

ドイツ西部では、すなわちフランクフルト（マイン河畔）、ヘッセン、ケルンおよびヴェストファーレン領域では、同盟の活動はおおいに理解こそされた。とはいえここではいつも、しっかりとした足場を生み出すことはそれほど容易ではなかった。というのは、しばしばすでに別の文化活動がわたしたち同盟の活動にとって対象となる人々のエネルギーを奪っていたのであった。ひとつは美学的に感受性の強い性格の持ち主たち（かれらは学者的研究の静けさのなかで、あるいは同じ考え方を有する小さなグループのなかで、自分たちの問題を究明するのだが）の彫琢的文化活動であり、ひとつは教皇権至上主義派の権力（それは、孤独な人間存在の自由に耐えることができないゆえに、情熱と良心を束縛している）との格闘である。—そして教会との闘いのなかにいる人々、かれらは、今日《=1922年》再び本当に特別におおなる活気をみせている（たとえば、青春の泉=運動《Quickborn=Bewegung》のなかで）あのカトリック的生活の創造的力にたいしても安易に心を動かすことはない。

さらにドイツ西部における「民主主義的」側面は、それはしばしば、アテネにおけるように、商人的=寛容的貴族政体の精神でしかないのだが、献身、犠牲、社会的行為への意志を容易には浮かび上がらせることはない。

したがって、フランクフルトの同盟の友たちが、1921年5月17日と18日に聖霊降臨祭（復活祭後の第7日曜日）大会を市役所の市民ホールで挙行することに成功したとき、それだけより喜ばしくわたしたちによって歓迎された⁵⁾。たとえ内容的にその会議が、ひとつの要素に至るまで、同盟の友たちに何も新しいものをもたらさなかったとはいえ、しかしその理念の影響は格別のものがあって、ヘッセン邦を越え出た。そしてその会議が同盟の活動を際立たせた新しい光とは、それは実験学校の問題、全教育問題との関連における職業の問題であった。オルガ・エシヒはフランクフルトでそのテーマを、実験学校生活での豊かな実践的経験にもとづいて取り扱った。そしてそのようにして、そのテーマが徹底的検討のためにもう一度、ヘッセンの邦連盟によって1921年10月6日と7日にオッフェンバッハの同盟大会に提出された⁶⁾。職業と人間存在を均衡させるというその課題は同盟には非常に重大であるように思えたので、同盟は、それらの問題にたいして社会がもっともっと広範に興味をもつように全力を尽くした。フランツ・ヒルカーは『生活学校』誌において2つの号をそのテーマにあてた。ひとつはオルガ・エシヒ著『生産学校の環としての生活学校』（第5号）であり、それはプロイセンの専門学校と補修学校制度の評価のための包括的文書資料を伴っていた。そしてもうひとつは、フランクフルトでは輪郭のみ与えられたプランのより厳密な構成のためにオッフェンバッハの諸

成果がオルガ・エシヒの『職業と人間存在』（第8/9号）のなかで活用された。ここでは再び新しい領域に足が踏み入れられている。『生活学校』誌の第8/9合併号は経済的・実践的生活から誕生し、集中的に「職業」（Beruf）と「召命」（Berufung）の両概念（それらは実り豊かな生活のために再び統一されねばならない）の結婚《融合》を志向した。その結果、そこでは生産学校思想の豊富化のために重要な研究がなされていた。教育的生産と資本主義的生産の間の今日的《1922年当時》葛藤は職業問題に害を与えている。職業は今日、召命であると感じられる使命でなく、かえって資本主義的利潤経済のシステムにおける隙間である。その隙間は大きくて閉じられねばならない。それによっていかなる摩擦も、いかなる利益の損失も生じないように。その隙間に、まさにその者がそれなりに自己の場所を占めるという限りで任命される。その状況に、古い中等学校が相応した。中等学校は官僚、商人、技術者、教師、医者、裁判官等を、常に需要に応じて、提供した。その要求に、民衆学校は、熟練労働者や未熟練労働者を送り出すために、専門学校の側面へのその拡張によって相応した。将来、それに対応するのは共同体にたいする貢献への内的召命である。わたしたちは、それゆえ技術的かつ衛生的に模範的な共同体を、責任ある活動のなかで果たされるべき授業時間の枠として必要としている。そのような共同体の端緒を認識させるのは、鉄道管理機関の仕事学校、福祉施設の枠内での料理教室であり、さらに私的産業の少なからずの仕事学校もまたそうである。その意味において生産学校は有機的に滔々と流れている経済生活に組み込まれ、そして職業学校ととともに適合しなければならない。

ヘッセン邦でのそれらの大会では全般的にみて、包括的な活動が問題となったので、1921年の昇天の祝日《「復活祭」からの40日後》と秋に開催された2つの別の大会では生産学校思想の集中的な仕上げに、注意が向けられた。

1921年の昇天の祝日大会（5月4日と5日）は、体験問題から、もっと言えば、創造的なものの視点から現れたさまざまな提起についての検討を継承した。「芸術と学校」というキーワードのもとで、まず水曜日《4日》の午後に、再びランクヴィッツの市フェスティバルホールで、さまざまな一般的な問題が論議された。そのなかで最重要のポイントは（オスカー・ヴルフ《Oskar Wulff》）の子ども芸術の心理学的基礎であった。その後、木曜日に個別の諸問題に移った。すなわち造形芸術、音楽、リズム体操。その会議で出されてきた諸見解は通常の芸術概念から余りにも乖離していたので、それらにもまた『生活学校』の1つの号（第10号）が捧げられた。それ以前にすでに『新教育』の1921年5月号が会議についての重要なイメージを提供

していた。

「それゆえ芸術が学校のなかに存在するべきとき」と、フランツ・ヒルカーは『生活学校』のその号で述べているが、「その道は個人的体験から、あるいは自己の創作や構成の諸問題から芸術に至る。そのような芸術摂取は単に楽しいだけではない。それは聴取者や観察者の内面を豊かにしそして同時に創造的にする」。

そのテーマとの関連において、もう一度ヒルカーの青年祭、シェーンブルンの学校における文学体験についての研究が挙げられるであろうし、芸術教育の基本的な仕方としてのヨハネによるドイツ語教育に関する最近の研究が評価されるべきであるということが指摘されよう。すなわち論説「表現豊かな語りのための教育」が⁷⁾。

さらに1921年秋もまた同盟の思想の豊富化をもたらした。その際「婦人教育と経済改革」がテーマであった。ここでは、ある問題から他の問題へと、ある会議から他の会議へと張られた糸は多様に絡み合っていた。青年運動の分析において、女性の目覚めの特別な意義が指摘されていた。生産会議では女性の特別な生産力が指摘され、職業問題は一部で繰り返し職業か母性か（職業と母性のかわりに！）という袋小路に入ってしまった。かくして教育問題の全複合が経済的必要性との関連で一度は、婦人の視点から取り扱われねばならなかった。ちょうど、わたしたちが1922年秋に青年の視点のもとで問題全体をあらたに検討しよう強いられたのと同様である。ランクヴィッツにおけるその婦人教育会議⁸⁾は、平和のための示威運動を伴っていた。それには同盟のベルリン・グループが関与した。というのはそのグループ内には最初から平和主義思想が生きていたからである。敗戦側の有益性あるいは好都合性のための合理的原理としてではなく、また理想主義的な感情の弱さとしてでもなく、かえって献身に最終意志として、宗教的な根本姿勢にもとづく「戦闘的」平和主義として。1921年9月のベルリン総会は「諸国民宥和的平和主義の人類構築力にたいする」支持を表明した。同盟全体はまだ最終的な対応を決めていなかったのだが。

数学＝技術教授の特有な領域（その領域についてはM.ベルティンク（M. Baerting）が『生活学校』誌の第6号「数学教授の新しい方法」で取り組んだが）に至るまでの、記述してきたような諸問題の原理的検討とならんで、その基本的研究とならんで、小さな営みが、つまり現代の《1923年時点》緊急活動である闘いがあった。繰り返される新たな攻勢のなかで、同盟は鋭い論陣を張り、あらゆる政党的「現実」政治家たちを厳しく批判した。その政治家というのは、笑ってしまうような「超過」収入のごく僅かな代償でドイツの若者の健康と能力を奪っている連中である。

同盟はプロイセン、ザクセン、ヘッセンにおける各

邦政府に服務規程の枠内での中間的な学校憲章のための企画を提出した⁹⁾。しかし公然とした考察はまったくなされることがなかった。授業のオープン化については少なからず支持されていた。しかし依然として閉鎖的な教室のなかでは扇動が続いていた。教師身分の後継者（男女とも）について配慮されねばならなかったし、教育職業における女性の同権に（教育的な根拠から）配慮されねばならなかった。しかしそのような繰り返し掲げられる要求にたいする官公庁のさまざまな回答は、洞察のとるに足らなさを、役に立たない口ごもりを示している。

学校の新たな文献学化（9年制、外国語、「より高等な」教養）が差し迫っていたし、そして差し迫っている。とはいえ最大の危機は全国学校法案であった。それにたいしては粘り強い闘いが指導された。その闘いは必ずしも失敗したとはいええない。とはいえフランクフルト・アム・マインでは1921年の聖霊降臨祭に、同盟は直ちにその法案に反対する闘争戦線において戦闘に立つ一つであることが明らかとなった。一般ドイツ教員連盟と肩を並べて。

低俗文学の問題は、若干のグループにとって、道徳的健全化の、すなわち目的無き汚物にたいする一般的嫌悪のマントをまとって、自身の政治的・宗派的利益をあげることに貢献した。同盟はここでは警告的かつ基本的に啓発運動を前進させた。

そのように、日々の闘争が伴っている。その闘争はしかし明確にかつ純粋に最終目標と最高課題への常時的熟慮のもとでのみ実行されうる。かくしてその闘争はアラバスク模様のように、認識と悲劇の暗い流れに伴っている。その流れは、しかしここにおいて有益な仕方ドイツの国民生活を貫いている。

時代の渦の中で

（現在）

1922年1月1日付けで、ベーゲ博士は『新教育』誌の編集を辞した。エストライヒとカヴェラウはその後、同盟の関心事以外のことを考慮することなく、編集事務を担当した。

パウル・エストライヒの巻頭論文はますますより広範な注目を獲得し、他の誰もその時期の中核的問題をエストライヒほど適切に表現しなかったし、他の誰もエストライヒほど適切な時期に適切な言葉をみつけることはなかった。わたしたちは1921年6月の全国学校法案にたいするかれの警告を、1921年9月の諸都市会議の「学校改革」にたいするかれの厳しい言葉を思い出す。「崩壊が始まっている！徹底的学校改革者同盟員たちは今、何が起きているかを把握すべきである！そして今言われていること、すなわち頑張り通すということ！今やわたしたちは、40年間にもわたる荒野

への旅に出る！しかし彼方には祝福された土地が存在している。諸君は信念と力をもっているのか」。

1922年には次のように言われている。「たった1つの慰めしかない—そんな慰めなんか、くそくらえだ！一、状況はベーリッツ氏（Otto Boelitz, 1876–1951: ワイマル時代の極右ではないが、右派政党であったドイツ人民党に属し、1921年11月から1925年1月までプロイセンの科学担当国務大臣であった）をもまた前へ推し進めていこうという慰めなんか！かれは長い間頑張り通し、その結果かれは取り壊しの大臣となるであろう」。そしてそうだった。状況は君主主義者ベーリッツを共和国の番人とした。そして取り壊しが始まった。

3万人（あるいは4万人）の若い教師がすでに失業中である。授業料は高くなっている。闇屋たちが闇屋に相応しい学校を維持しているのだ。

「わたしたちは超満員のクラス、最高級の鍛錬や職務の営み、すなわち少ない授業と多くの技術、芸術、運動、実践的労働を（そのためには両親たちは資金をもちよらねばならない：両親クラブ）、それゆえ貧窮のなかの、貧窮をとおしての若者の幸福を授かるのか、どうか！諸君はそれを把握しているのか」。新しい国か、それとも自堕落か。『新教育』誌の1922年6、7、8月号はエストライヒの怒りと警告と覚醒のための呼びかけに満ちている。

「人類の課題は地球上をうろついているが、まだ郷土はない。それはドイツ人をとらえている、貪欲さや尊大さなしに！激しい愛のなかで！その場合、諸君は人類の信念に居場所を与え、その場合、諸君は地球を『獲得』する。というのはその場合、人類は『ドイツ的』であり、ドイツ人気質は人間性でしかないからである！」（マインツでの聖霊降臨祭のための6月の論説）

学校への財政支援を要求せよ！という言葉で7月号は始まっている。「授業料は統一学校と民衆に抗し、そして民族主義、君主主義および、（少なくともドイツでは）軍国主義を守り、ドイツ的カースト制度を守り、その教養による装甲のきらめきがわたしたちの目を眩ませている高等学校教員組合と大学教員組合の『教育理念』を守る毒針の壁である！」。

ドイツ政府と議会への突撃を！連日、学校への財政支援のためのデモンストレーションを！

そして徐々に学校への財政支援が基盤を獲得する。ヘッセン邦がまず最初にその事態を把握し、そして仕事に着手しようとした。その際、共和国条項が邪魔になった。そして今ではクララ・ボーム＝シュフ（Clara Bohm=Schuch, 1879–1936, 婦人参政権の運動家・社会民主党の政治家）は、次の共和国議会がその道を開くことを約束している。しかし社会民主党は、もはや手遅れであると理解している。

給与号俸による互いの区分けを排除せよ。編成せ

よ、格差なしに！段階分けなのか、あるいは編成なのか、とエストライヒは1922年の8月に問うている。「諸君が給与与俸を生み出したのであるが、諸君には罪がある。時代は新しい人間を要求する。収入によるのではなく、個性にもとづく編成を。もし共和国が給与の多すぎる部分をカットし、金儲けばかり気にかける人のかわりに、利得なしに仕事を成し遂げようとする人々に声をかけるならば、共和制支持者が集まってくるだろう！自ら、奴隷の階梯を生み出すな、共和制支持者よ！『人間教育』を欲する者は、物質的尺度を否定しなければならない！それは『理想論』だって？そう、わたしたちは理想主義者だ！そのようにして文化が現実となるのだ！」。

それは、この人間の《エストライヒ》、このグループの《徹底的学校改革者同盟》熱い意志であり、そして愛に満ちた人々、祖国を愛する人々、人間性を信じる人々のその小群《同盟》にたいする憎悪はますますより以上に膨らんでいる！

（かれらはどれほど互いに自慢しあっていることか！かれらはどれほど推賞しあい、そして引用しあっていることか！《＝誹謗の例》）曰く、すでに言語学者の筆先は、そのすべてが誇張であることを「証明」するほど、ささくれている。曰く、まったく嘘っぱちだ！曰く、まさに「改革」しようとしてされているが、しかし組織を維持し、拡張し、したがって注意深く論じようとしてされている！そしてエストライヒとかれの友人たちは身内の「悪口を言っている」と。曰く、まあ、多分まだエストライヒは、かれはなるほど突飛はであるが、誠実だが、しかし他の人々はどうか。エストライヒ以外は虚栄心、物欲、立身出世主義者であると。

わたしたちはそのような唱和について知っている。しかしわたしたちは力強く、きわめて真剣に言う。エストライヒ、あるいはそれ以外の誰かある学校改革者が問題になっているのではない。正しい論（正しい論は、しばしば恐ろしいカッサンドラ《トロイ王の娘で預言者、トロイ戦争のときにトロイの滅亡を預言したが、誰からも信じてもらえなかった》の運命である）なのか、あるいは正しい論でないのか、が問題になるのではない。はるかにより高次元なことが問題になっている。すなわちドイツ国民の、ヨーロッパ文化の存否が問題になっているのである。

そしてその認識、そのきわめて重大な把握、それは『新教育』誌のすべての頁で語られているのである。ゴールドデックが若者の心の孤独について語ってしようと、ヘルマン・ヘンケルが大企業労働者としてのかれの体験から告白してしようと、ヘルマン・ケリンクが民衆学校制度について報告してしようと、学校での体罰問題がドイツの「文化」生活を透視してしようと、国際的な思考が徹底的・民族的に把握されてしようと、資本主義にたいする生物学的・科学のおべっか

が認識されていようと。それらの目立たない号は、ドイツ民衆の内的事象のなかでますます重みを持ち、それらは、感傷性なしの、そして憎悪なしの、ドイツの生き生きとした生活の日記である。

ドイツの運命についてのその把握から、マインツの聖霊降臨祭会議のための思想が誕生した。そこでは、時代の恐ろしい困難について、そして新しい文化意志について証言されるべきである。問題全体が提示されるべきであり、自由な対話のなかで、さまざまな種類の人々は共同の仕事に至る道を悟るべきである。「人間の個々の活動領域から中心的に前進しつつ、最終的なまとめにおいて人間を際立たせること」が試みられている。「道徳的世界秩序の担い手としてのその人間の陶冶こそが、教育の課題でなければならない」。経済学、政治学、芸術、教育は、常に大きな文化的関連のなかで、すなわち人類的パースペクティブのもとで把握されるような、偉大なテーマであった。それは、わたしたちのマインツの友人たち、つまりそのヘッセンの疾風怒濤派の途方もないプランであった。そのような開始への意志は、かれらの栄光を高める¹⁰⁾。

そのプランの実行は思想に完全には相応していなかった。期待されたすべての人がやって来たわけではなく、そこで語った人々の一部は、同盟の思想に完全に無縁であった。かれらは美的・古典文化的意志の担い手であり、一部は自分たちのお気に入りの思想を欲し、かれらは確かに時代の分裂状態の鏡像であったが、しかし常に未来への寄与者であったわけではなかった。しかしとはいえ、あの会議の、忘れられない数時間は生き続けた。わたしたちがマインツでの聖霊降臨祭会議において協議し実行に移したとき、というのは生活の中核からの言葉は行為であるから、3名の人について尊敬すべき文化的教養人であることが周知となり、3名の人がかれらの日々の犠牲によって崇められた。すなわちマリア・モンテッソーリ、インド人のバルガワ (Bhargawa) 博士、そしてマルティン・ブーバーであった。(モンテッソーリは) 日々の義務履行の力、すなわちヨーロッパ的、人間的力であり、(バルガワ博士は) 日々の支える力、すなわち耐える、東洋的信念であり、(ブーバーは) 日々の観察の力、すなわちユダヤ的、神秘的把握である。

とはいえ純粋にヨーロッパ的に、純粋にゲータ的にマリア・モンテッソーリがわたしたち同盟の文化の象徴に成長した。

そしてそのことは非常に不思議であるかもしれない。その関連において、誠実なささやかな活動の日々の生活について何か語られねばならない。そのような誠実なささやかな活動なしには、同盟は成立してこなかったであろうし、すべての弁舌は消え去ってしまうだろう。大げさな言葉よりもさらに重要であるのは、ささやかな行為であり、名前が呼ばれるよりもよ

り重要であるのは、ちょっとした誠実性であり、辛抱強い目立たない活動である。そしてそれゆえにここで3人の名前をあげておこう。すなわちイルーゼ・ミュラー＝エストライヒ女史、ヘルタ・ベック嬢およびベルゲルト博士である。いかなる種類の活動と比べても決して恥ずかしくない邦の至る所での当然の穏やかな共同活動（マインツのA.ルッツだけを指摘しておこう）がなかったとしたら、わたしたちは、わたしたちは現在の高みにまでこなかったであろう。それなしでは、数多くの、新しい、勤勉な、しばしば十分に、それは正当であるのだが、地域的困難から出発しつつ一般的諸問題に、大胆なイニシアティブにおいて自主的に着手する地域組織が、ベレスラウ、ケルン、シュバンダウ（ここではM.パンテンとT.エルフケンがかれらの宗派混合学校のために不屈に闘っている）、リーザ、ケムニッツ、ルッテンヴァルデ、オッフエンバッハ、クロイツナッハ、ランゲン、ラウベンハイム、ハンメルン、レール等におけるように、ありえなかったであろう。その活発な従事者たちにたいする感謝はすべて、かれらの創造に、そして新しいものの生成にたいするかれらの構えによるものである。そして希望の星はかれらにとっては、若者から登場するのである。わたしたちに若者は、かれらは普通に臣下ではないのだが《帝政が倒れて数年経過している》、かれらの希望を投げかけ、わたしたちにかれらは、かれらの無制約性を、嫌悪か、好感かはともかくとして、投げつける。青年運動と青年教師たちは、かれらがまだ健全な本能を有しているかぎり、わたしたちを相手に格闘している。ベルリンにおいてアドルフ・コッホ（Adolf Koch）によって指導されているグループのような、いくつかの青年教師グループは、わたしたちに期待させる。

そして恒常的な刺すような、そしてせきたてるような陳情活動についてもまた、その陳情活動を少なからずの人々は余計で、それどころか有害であるとみなしてはいるが、わたしたちは次のように考える。しかし最終的には、それらの要求は浸透し（わたしたちはそのことをまさに繰り返し体験している！）、ついには秘密審議会（Geheimrat）が話題となり（秘密審議会については、わたしはしかしすでに以前にすでに聞いたことがあり、それはとにかくありそうなことに思える）、結局は世論のなかに刻印されると。

したがって次のように述べることは無駄ではない。同盟は繰り返し高校卒業資格試験の廃止を要求し、同盟は大学への新しい入学権のための指針を提案し、《進路》弾力化の問題意識を持ち続け、同盟は児童・生徒保護法を作ろうとし、同盟は外国語教育の迷信と闘い、同盟は新しい《全国教育》会議法を練り上げ、同盟は学校における罰の規制のために包括的な資料を収集し、そして新しい処置を根拠付け、同盟は高等学校（Oberschule）や上構学校（Aufbauschule）のような新

しいドリル機関に反対し、同盟は軍国主義に貢献するような、恥ずかしげに「体育」とよばれている「鍛錬」に激しく抵抗していることは。すべてのそれらの、そして多くのその他のアクション、それらは無駄でないし、それらは社会的啓発と世論を生み出している。そしてそのような世論からのみ、実り多い行為が誕生することができる。

そして繰り返し、同盟の思想は新たに検討されねばならず、ますますより深く生産思想は把握されねばならず、常に新たにわたしたちは過去の仕事を破壊せねばならず、わたしたちは新たに建設し、そして再び破壊し、そして再び新たに建設しなければならない。わたしたちの同盟の意欲を表明する最新の《1922年時点》文書は『人間教育』（Menschenbildung）である。それは1922年の1月から3月までベルリンの教育・教授研究所において同盟の10名の代表者によって行われた講演を包括したものである¹¹⁾。そしてすでに、わたしたちは新しい諸問題が生じていること、それらはより包括的かつより徹底的に取り扱われねばならないことに気づいている。「若者の苦難」についての来るべき秋の大会を経由して、その路線は「幼稚園から大学まで」というテーマについての1923年のケルンでの聖霊降臨祭会議に、さらには1923年の秋の大会に通じている。その1923年の秋の大会では、生産学校思想が新たに、かつ拡大的に構成されねばならない。

3年間の、決して休むことのない活動の後、今やすでに一般的な意識向上が達成され、国内にとどまらず、ひょっとするとより強く外国において注目されるような文化的地位が獲得されている。なぜわたしたちは友人をイギリスやアメリカにおいて、まさにフランス、イタリアそしてスイスにおいて、そしてひょっとしてなお多くイディッシュ語《ユダヤ系ドイツ語》を語るリトアニアにおいて、そしてロシアやウクライナにおいて有しているのか。その理由は、至る所で偉大な文化意志が感じられ、そしてそこにおいてヨーロッパの、まさに人類の将来の希望があることが知られているからである。

「あなたがたが欲していることが現実となるとき」、すでに少なからずの外国人がわたしたちに語っている、「ドイツは人類の最大の希望である」。

そしてそのように、わたしたちはジュネーブでの第Ⅲ回道徳教育国際専門家会議において、そしてまたロンドン平和専門家会議において行動し、そしてハルコフ（Charkow）の専門家会議の後、ウクライナでの学校専門家会議に招待されている。

同盟の若干のメンバーが興味本位の旅に出て、そしてそれについてユーモラスに報告することが重要なのではない。心を徐々に人類共同体へと準備することこそが重要なのである。

わたしたち、わたしたちは同盟のなかで闘っている

のだが、わたしたちはしっかりと知っている。非常に古い精神がまだわたしたちのなかにあること、わたしたちは先行き不明の時期にわたしたちの敵の憎悪に満ちた判断に出会うこと、わたしたちがわたしたちの意志のひとつの不変な戯画の周囲を回転していることを。わたしたちはいったいどの点で、調和的で、純粹で、創造的で、そして共同体に貢献する人間であるのか。そしてにもかかわらず、わたしたちは、その弱さと卑屈さにもかかわらず、わたしたちのなかにドイツ国民の希望と将来が横たわっていることを知っており、そしてわたしたちの旗が倒れ落ちると、ドイツは、そしてまさしくヨーロッパは過去の時代となってしまうことを知っている。もしわたしたちが破滅するとき、何かさしざわりあるのか。わたしたちは自分を越えたい。というのは、わたしたちは、粉碎されるほどの価値を有しているからである。

原注

- 1) Aus Siegfried Kawerau "Gesellschaft und Erziehung" in *Vivosvoco*, *Zeitschrift für neues Deutschland*, Dezember 1921, S. 382ff.
- 2) Berlin W 30, Freisingerstr. 5a.
- 3) Vgl.: *Mitteilungen des Bundes, Neue Erziehung*, Juli 1921, S. 52ff.
- 4) Vgl.: *Mitteilungen des Bundes, Neue Erziehung*, November 1921, S. 82ff.
- 5) Vgl.: *Neue Erziehung*, Juni 1921, S. 191ff.
- 6) Vgl.: *Neue Erziehung*, Oktober 1921, S. 325
- 7) Heft 7 der "Lebensschule".
- 8) Vgl. *Neue Erziehung*, Oktober 1921.
- 9) *Mitteilungen, Neue Erziehung*, Januar und Februar 1921.
- 10) Zur Mainzer Tagung vgl. die Festnummer Juni 1922 und die "Mitteilungen" Juli und August der "Neuen Erziehung", sowie die Heste des "Pfeil", der von Zszech redigierten Mainzer Monatschrift der Hessischen Bundesfreund.
- 11) Verlag Schwetckhe & Sohn, 1922

訳者から（解題にかえて）

ドイツ国憲法（ワイマル憲法）は1919年7月に採択された。いわゆるワイマル共和国の誕生である。そして同年秋に徹底的学校改革者同盟が誕生した。その同盟は間違いなくワイマル共和国の申し子である。事実、同盟はワイマル共和国と運命を共にした。すなわち14年弱という短い期間しか存在しなかったのである。もっとも、「よくぞ14年も持ちこたえた」という意見もある（酒井榮八郎『ドイツ史10講』岩波新書2003年、183頁）。その意見によれば、1920年にはすでにワイマル共和国の国会における民主的多数派は失われていたとのことである。徹底的学校改革者同盟のように、誠実に共和国を守ろうとする人たちの「辛抱強い、目立たない」尽力があったからこそ、ワイマル共

和国は14年も続いたといえるのかもしれない。

1919年秋の以来の集中的な社会活動により、同盟は短期間に知られるようになった。特にベルリンではそうであった。1920年秋の時点で同盟のベルリン地区グループには、おおよそ300名のメンバーしか属していなかった。しかもその活動全体はごく少数の男女によって担われていた。だからこそ、同盟とその理念が、とりわけ創設以降の最初の数年間におおいに重要視されたことは、驚きである。全国学校会議への招待、そして何より同盟の指導的立場の人々を文部省や学校行政の責任者として採用しようとする努力はそのことを証明している。

エストライヒは自分の任務を、国民への集中的な啓発活動であると考えた。そのことによってしか、国民の意識を変えたり、そして社会の徹底的変革のための基礎を生み出したりすることはできないと信じていたからである。例えばかれは1921年にある友人宛ての書簡のなかで次のように書いている。「わたしの学校改革活動は現在にたいしてはまったく悲観的であるが、しかし近い将来にたいしては楽観的である。わたしには重要なことは、今後しばらくの間、啓発的アジェーションであるように思える。というのは、社会における理解なしには、新しい学校を建設することはできないからである。」（Brief Oestreich – von Mellenthien vom 13.6.1921, zitiert nach: Ingrid Neuner: *Der Bund entscheidener Schulreformer 1919–1933*, Verlag Julius Klinkhardt, Bad Heilbrunn/Obb. 1980, S. 302）

同じ年にカヴェラウもまた、2年間の活動を振り返りつつ、同盟の目標を次のように特徴づけた。「わたしたちは確かに一般的改革のためのアジェーションを粘り強く継続しなければならない。なぜなら両親、公務員、教員の理解や善き意志なしにいかなる改革も実行できないからである。しかしわたしたちは具体的個別的諸問題に関する熟慮もまた私たちの同盟の課題としなければならない。とはいえ個々の地域の特徴を取り入れた新しい学校の実現は、特別な『実験学校』を引き受けることと同じく、同盟の課題ではありえない。その意味での同盟の責任は理念的でしかありえない。」（Kawerau: *Ein zweites Jahr Bundesarbeit*, in *Neue Erziehung* 1921, S. 73）

共和国全体におけるさまざまな邦グループないし地区グループの成立とともに、何よりも出版物による活動が意義を増した。1920年の秋にはザクセン、ハンブルク、ブレーメン、フランクフルト、マインツ、シュテッティン、ケーニヒスブルク、ハメルン、ハノーファーそしてバイエルンにおいて、同盟グループが活動していた。

1921年秋には、エストライヒは友人宛ての書簡のなかで同盟の状況について次のように語っている。「同盟は今やおおよそ30の地区グループと2000ないし3000

の同盟員を有している。同盟は独自の実験学校を持たず、何より教師と保護者のなかでの啓発に尽力している。」(Brief Oestreich – Erisabeth Rotten vom 11.10.1921, zitiert nach: Ingrid Neuner: *Der Bund entschiedener Schulreformer 1919–1933*, S. 302) ベルリンのメンバーの数はその時期に635名になっていた。そして1923年の秋には、同盟は地区グループの数も同盟員の数も頂点に達した。

そのような時期に、カヴェラウの『徹底的学校改革者同盟』は刊行されたのである。

1922年にパウル・エストライヒが盟友のジークフリート・カヴェラウに徹底的学校改革者同盟の「歴史」執筆を委ねたのは納得できる。歴史教育の理論家でもあったカヴェラウは間違いなく適任者であった。しかし1919年の初秋に誕生した同盟のたった3年間の「歴史」を出版することにどれほどの意義があったのだろうか。その疑問にエストライヒ自身が次のように解答している。

「これまでの道程を知らない多くの新しい友人皆のために、わたしたちの闘士たちのために、官公庁および外国にたいする証明として、敵および離反者による歴史偽造にたいする防衛として…」(Ⅰ, 184頁)。

「この同盟の編年史がわたしたちにとって、中傷の暗雲を吹き飛ばし、おしゃべりを止めるために手助けになるであろう。今や、不正確に考えている敵はわたしたちについて学ぶことができる。」(Ⅰ, 184頁)

仮に1919年から1922年の3年間で、平凡な年中行事がくり返されるだけの3年間であったなら、歴史執筆は必要なかったであろう。逆にその3年間は、まさに「時代の渦の中」にあったのである。たとえば1920年のエストライヒの論説「苦境と支援」のなかで、「反動派の高まる圧迫、カップー揆の前触れ、しかしまた左翼からの不可解な攻撃」という言葉をみることができる(Ⅱ, 122頁)。徹底的学校改革者同盟が厳しい政治的、イデオロギー的論争のなかにあったのだ。

カヴェラウの『徹底的学校改革者同盟』から、同盟の主導教育理念が、労働学校⇒体験学校⇒生産学校と変遷していることが明らかになる。とはいえ、新しい学校における教育を通して、若者を身体的に鍛錬され、精神的に自由で、社会的に心情をもち、かつ意志強固な国民共同体と人類の構成員にする、という目標(Ⅰ, 188～189頁)は、そのための基礎は生徒と保護者と教育者の教育共同体であるという理解とともに、一貫しているように思える。

たとえば歴史教育にかかわって、カヴェラウは次のような疑問の解明を進めているとしている。

「時代にたいする個人の関係は、経済的諸要因の関係はどのようなものか。ある時代のイデオロギーはどのようなものとして把握されるべきであり、教育問題は社会的関連のなかでどのようなものとして把握され

るべきか。そしてわたし自身は、いったいどのようにして子どもたちを新しい精神において、すなわち自主性と創造的批判の精神において教育するのか…」(Ⅱ, 126頁)。

訳者がエストライヒやカヴェラウに魅了されるのは、確かにかれらの高邁な主張のためでもあるが(現在の我が国の学校教育や社会科教育をめぐる低次元な、破綻寸前の議論[一方でアクティブ・ラーニングや言語活動の充実を提唱・強調しながら、他方では「愛国心」を強い、一方で道徳教育を説きながら、他方で過去の国家犯罪から目を背ける]とは比較にならない)、同時にその素朴さや謙虚さのためでもある。最後にそのような素朴さや謙虚さを際立たせる言葉を引用しておこう。

「大げさな言葉よりもさらに重要であるのは、ささやかな行為であり、名前が呼ばれるよりもより重要であるのは、ちょっとした誠実性であり、辛抱強い目立たない活動である。」

(2015年8月17日受理)